様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 6 月 10 日現在

機関番号：３２６９３
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：　　平成２１年度～平成２２年度
課題番号：２１８９０２７２
研究課題名（和文）
精神科看護師のリフレクションを活用した教育プログラム構築に関する基礎的研究
研究課題名（英文）
Study on Development of educational programs utilizing reflection of psychiatric nurses

研究代表者
堀井湖浪（HORII KONAMI）
日本赤十字看護大学・講師
研究者番号：４０５２０７６３

研究成果の概要（和文）：精神科看護師 5 名から、提示された「気がかりな出来事」の記述と面接内容を分析した結果、参加者は【気がかりを覚える】と、【気がかりを確かめる】【状況の解釈を試み仮説を立てる】【関わりを吟味し試みる】【関わりながら観察し評価する】【状況を再解釈する】の段階を行きつ戻りつしながら状況に取り組んでいた。そして【自分と向き合う】ことが状況によりコミットすることとなり、リフレクションを深化させていた。
　継続教育においてリフレクションが促進されるためには、ファシリテーターの育成が望まれる。ファシリテーションを学ぶためには、ファシリテーターとしての実践をリフレクションするための体験学習的プログラムが必要である。

研究成果の概要（和文）：Study participants were 5 psychiatric nurses. Participants were presented with descriptions of and interviewed about “emotionally impacting events.” “Emotionally impacting events” were qualitatively analyzed. Results indicated that psychiatric nurses coped with situations while transitioning back and forth between stages of “recalling the emotional impacts” of complicated situations and “ascertaining the emotional impacts of situations,” “generating hypotheses to attempt to interpret situations,” “attempting to examine one’s involvement in the situation,” “being involved in the situation and observing and assessing that situation,” and “reinterpreting situations.”　Additionally, “facing oneself” may lead psychiatric nurses to be more involved in a situation and encourage reflection.

In continuing education, to encourage reflection, the training of facilitators is desired. In order to learn how to facilitate, a hands-on program is needed to learn from experience to reflect on the practice as a facilitator.

交付決定額

	直接経費	間接経費	合　計
21 年度	650,000	195,000	845,000
22 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1250,000	375,000	1625,000

（金額単位：円）

研究分野：精神保健看護学
科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学
キーワード：精神科看護　リフレクション　ファシリテーター　現任教育　教育プログラム

１．研究開始当初の背景

2004 年 3 月、厚生労働省からの『新人看護職員研修の標準的な到達目標と指導指針』の提示を受けて、日本精神科看護技術協会では、精神科独自の標準到達目標および指導指針を作成することを目的に、精神科に勤務する新人看護職員臨床実践能力向上推進事業を開始した。その過程で浮かび上がってきたのは、看護職員の背景の多様性と施設側の要因による現任教育の難しさと、対人関係の構築に困難性を抱えているという対象の特徴など、日本の精神科医療の実態を反映した精神科および精神科看護ならではの特殊性であった（遠藤，2006)。

精神科看護において、重要な実践能力である患者との治療的な関係を築くための対人関係能力を養うためには、一般的な知識や技術の適用について学ぶだけでなく、患者と関わっているその場において何が起きているかをリフレクションすることが重要である。

リフレクションは経験から学ぶための具体的な方法として注目されつつあるが、臨床看護師のリフレクションを詳細に分析したものはわずかであり（池西・田村・石川，2008；奥野 2010)、院内教育におけるリフレクションを活用した研修の実践報告（小竹,2009）では、ファシリテーターの育成が課題としてあげられている。継続教育においてリフレクションを効果的に展開していくためには、ファシリテーターの育成が必要である。

そこで、精神科中堅看護師を対象に、リフレクション研修のファシリテーターとしての役割を担うため、リフレクション能力の育成を図るための教育プログラム構築の着想に至った。

２．研究の目的

本研究では、以下の 2 点を明らかにし、それらをふまえて、精神科看護師の継続教育におけるリフレクション研修のファシリテーター育成プログラムの構築に関する検討を行う。

（１） 精神科中堅看護師の看護実践のリフレクションのプロセスを明らかにする。

（２）看護実践について研究者との継続的な対話によるリフレクションが、どのような変化をもたらすのかを明らかにする。

３．研究の方法

（１）用語の定義：リフレクションとは、不確定あるいは複雑な状況の実践のなかで生じる不快な感情、‘気がかり’をきっかけにして自分の経験や知識、感情や思考を活用して、出来事に取り組む過程、および、事後に出来事を振り返り吟味する取り組みの過程。

（２）研究デザイン：質的記述的研究

（３）研究参加者：現任教育プログラムが組織化されている 300 床以上の精神科病院 3 施設に勤務する精神科臨床経験 5～10 年程度の看護師のうち、教育担当師長または病棟師長からみて患者との関わりが優れているとの推薦を受け、研究参加に同意を得られた 5 名（男性 2 名・女性 3 名)。

表：研究参加者の概要

	経験年数	看護教育	勤務病棟
A	6 年	修士課程	慢性期閉鎖病棟
B	7 年	修士課程	亜急性期開放病棟
C	8 年	専門学校	社会復帰病棟
D	8 年	専門学校	急性期病棟
E	8 年	4 年制大学	慢性期閉鎖病棟

（４）データ収集方法：半構成的面接法

①インタビューは 1 回 60 分～90 分程度、継続的に 5 回行い、まとめとして 1 回行った。

インタビュー内容は参加者の許可を得て録音した。

②毎回のインタビューでは、参加者に事前に「気がかりとなっている出来事」の概要について記述を依頼した。

③「クリティカルインシデント分析」の方法に準拠して、直面した場面において認識された事象を、詳細かつ認識の変化に着目して引き出すことができるよう自由に語ってもらった。

（5）データ分析方法

①リフレクションを構成する要素の抽出：面接内容の逐語記録を作成し、出来事を時系列に再構成し、その内容を出来事ごとにコード化し、このコードの類似点、相違点を比較し、分類した。

②リフレクションのプロセスの明確化：再構成した「気がかりとなっている出来事」について、リフレクションを構成する要素がどのように含まれているか、要素それぞれの関連性を見出し、リフレクションのプロセスを明らかにした。

③インタビュー全体を通して、リフレクションの内容にどのような変化を生じているのか、構成要素やメカニズムの相違点に注目し分析した。

（6）倫理的配慮

本研究の実施にあたり、日本赤十字看護大学の研究倫理審査委員会の承認を得た。さらに、研究協力施設の要請に応じて研究倫理審査委員会の承認を得た。研究参加者には、研究概要と倫理的配慮について、文書を用いて説明し、同意書への署名を以って同意を得た。

４．研究成果

（1）リフレクションの要素とプロセス

①リフレクションの要素

参加者に提示された「気がかりな出来事」を分析した結果、リフレクションの要素としては、【気がかりを覚える】【気がかりを確かめる】【状況の解釈を試み仮説を立てる】【関わりを吟味し試みる】【関わりながら観察し評価する】【状況を再解釈する】【自分と向き合う】の７つが抽出された。

【気がかりを覚える】とは、違和感や困惑などをきっかけとして、その状況に留まらざるを得ないような‘気がかり’を認識することである。これは〈患者の訴え・言動に違和感を抱く〉〈目標達成がこのままではうまくいきそうにもないと感じる〉〈患者の言動・生活状況の変化の気づき〉〈患者の反応に対するネガティブな感情に気づく〉から成っていた。

【気がかりを確かめる】とは、その後の関わりの必要性を確認することにもつながる、認識した‘気がかり’は何なのかを確かめることである。これは、〈通常の働きかけを試みて患者の反応をみる〉〈患者に直接確認する〉から成っていた。

【状況の解釈を試み仮説を立てる】とは、気がかりについて探求しながら、重なり合うようにして状況に影響していると思われる要因を吟味し、状況の解釈を試み、何が起こっているのか仮説を立てることである。これは、〈患者の気持ちを推量する〉〈患者の家族背景・生育史を想起・照合する〉〈最近の出来事や治療経過を想起・照合する〉〈過去の類似する経験・出来事を想起・照合する〉から成っていた。

【関わりを吟味し試みる】とは、直面している状況を望ましい方向へ導くために具体的な方法について関わりを吟味し試みることである。これは、〈過去の類似する関わりを想起・照合する〉〈看護師自身の感情を意図的に活用する〉〈その場しのぎの方法をとりあえずやってみる〉〈解釈に基づいた意図

的な関わり〉から成っていた。

【関わりながら観察し評価する】とは、関わりながら患者の反応をとらえ、関わりを評価することである。これは、〈患者の言動から反応をとらえる〉〈意図した結果が得られる〉〈意図した結果が得られない・患者の満足が得られない〉から成っていた。

【状況を再解釈する】とは、出来事から距離を置き、状況を捉えなおすことである。これは、〈出来事の成り行きを細かく観察し、吟味する〉〈患者と自分の関係性の捉えなおし〉〈問題状況の明確化（焦点化)〉から成っていた。

【自分と向き合う】とは、自分の感情や思考、性格、経験、信念など、自分の内面と向き合うことであり、直面した状況との対話や、患者との相互作用、または関わりを振り返って行われていた。これは、〈自分の性格と・感情を自覚する〉〈自分と患者との相互作用について吟味する〉〈自分の家族背景・生育史を想起する〉〈自分の看護について考える〉から成っていた。

②リフレクションのプロセス

参加者は、【気がかりを覚える】と、【気がかりを確かめる】【状況の解釈を試み仮説を立てる】【関わりを吟味し試みる】【関わりながら観察し評価する】【状況を再解釈する】の段階を行きつ戻りつしながら状況に取り組んでいた。そして【自分と向き合う】ことが、状況によりコミットすることとなり、リフレクションを深化させていた。

（２）参加者のリフレクションの変化

継続的に実施した面接を通して、参加者のリフレクションの内容に次のような変化が認められた。ある参加者は、【状況の解釈を試み仮説を立てる】際に、〈患者の家族背景・生育史を想起・照合する〉ことを通して、患者の問題行動を解釈しようとする試みが語られるようになった。

また別の参加者は、研究者との対話により〈自分と患者との相互作用について吟味する〉こととなり、自分の患者との関わりの傾向に気づき、〈自分の看護について考える〉こととなった。こうして頻繁に【自分と向き合う】ことがみられるようになった。

また、研究者との対話によるリフレクションは、【状況を再解釈する】取り組みでもあり、そのことから、患者理解が深まり、新たな関わりの糸口を見出していた参加者も認められた。このことから、実践についてのリフレクションが促進されるためには、「対話」が有用であることが示唆された。

（３）リフレクションのファシリテーター育成プログラム構築に関する検討

ファシリテーションとは、集団による知的相互作用を促進する働きのことである（堀, 2004)。リフレクションをファシリテートするためには、ファシリテーションスキルについて学ぶことはもとより、ファシリテーター自身がリフレクティブであることが重要である。

まずは、定期的に自身の実践についてリフレクションする場や機会をセッティングすることが重要であり、さらに、ファシリテーターとして他者のリフレクションに携わった経験をリフレクションする場や機会をセッティングするなどの体験学習を取り入れたプログラムが必要と考えられた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１件）

堀井湖浪、精神科に勤務する看護師のリフレクションのプロセスに関する研究、日本赤十字看護大学紀要、査読有、25 巻、2011、32 - 42.

６．研究組織

(1)研究代表者

堀井湖浪（日本赤十字看護大学）
研究者番号：４０５２０７６３